
仮面ライダー?(ツヴァイ)

作者月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー？（ツヴァイ）

【Nコード】

N5698L

【作者名】

作者月詠

【あらすじ】

『エコの街』と呼ばれる風都：その仮面ライダーである『W』と『アクセル』…そして『スカル』。そしてそこに現る四人目のライダーとは…!!？
『さあ、お前の罪を聞かせる!』

【？の出会い／徘徊する二重の鬼】（前書き）

ず、ずいぶんと長いこと書いたもんだなあ…（汗

【？の出会い／徘徊する二重の鬼】

風都^{フウト}、別名『エコの街』として有名な街。

ここでは、とある都市伝説が有名である。

その名は『仮面ライダー』

この物語はW^{ダブル}、アクセル、スカルに続く四人目の仮面ライダーの物語である。

「暇だ…退屈だ…客もこねーし…ハア」

彼は【伊凧^{イナギ} 涼^{リョウ}】。

海外の大学を飛び級で卒業した天才少年。

そしてここ、【喫茶 イザナギ】は風都の隠れた名所の一つだ。

・・・っと言っても、客足は日頃から少ない訳で…。

涼「バイクの整備でもすっかな…？」

涼が店の奥へ入ろうとしたその時。

『園崎若菜の！ヒーリングプリンセス！』

店のラジオから人気ラジオ番組が始まった。

涼「おとつと…聞き逃すところだった。

・・・コーヒーでも入れながら聴くか」

そう言っつて涼はコーヒーを入れながらラジオを聴く。

『園崎若菜の、風都ミステリーツアー！

みんなのおはがきによると、仮面ライダーさん大活躍の様ですね！！

そこでまた、新たな都市伝説が！

えーっと、PN、紅茶好きさんから！

「大変です若菜姫！最近巷で桃太郎に出てきそうな《鬼》が出没しているようです！

なんでも、「赤と青、どっちが好みだ？」と聞いて、赤だと殺してから金品を奪い、青だと詳しい話は知らないけど、受けた人は皆、顔面蒼白になるそうです！

助けて！若菜姫！」だそうです！
怖いですね？鬼ですよ鬼！鬼は、普通の豆じゃなくて炒めた豆が良
いそうですよ？

以上、風都ミステリーツアーでした！』

涼「鬼”か…検索してみっか」

ラジオが終わると同時にコーヒーを飲み終えた涼は今度こそ店の奥
へ行き、地下へ繋がるエレベーターに乗って地下二階へ行く。

エレベーターを降りると、USB大の差込口がある機械があり、ポ
ケットからサファイアブルーのUSBの様な物と灰色のUSBの様
な物を取り出し、双方に付いてるボタンを押す。

《アース EARTH!》

《ライブラリー LIBRARY!》

USBの様な物の名称は【ガイアメモリ】。地球上のあらゆる物の
記憶を収めたUSBの総称である。

そしてガイアメモリを使用する際に必ずガイアメモリから声が聞こ
える。

それが【ガイアウイスパー】である。

EARTHは『地球の記憶』、つまりガイアメモリの元祖とも言える代物だが、これはレプリカである。

LIBRARYは『図書館の記憶』である。

この二つを使用する事で、【大地の本棚】が発動する。

ガイアメモリが差し込まれた機械で開いた扉の奥に進むと、真っ白い空間に無数に空に浮かぶ本棚があった。

涼「検索を開始する。キーワードは”鬼”」

浮かんでいた本棚達が動き出す。

涼「セカンドキーワードは…”赤と青”」

さらに本が減る。

涼「ファイナルキーワードは…”強盗殺人”」

ついに絞り込まれた本が一冊になった。

涼「『^{オーガ}OGRE』、鬼の記憶か…」

検索結果：^{オーガ}OGRE

項目：ガイアメモリ

未完成

鬼に関する記憶を孕んだガイアメモリ。

推測上、^{パワータイプ}剛力型と思われる。

充分に気を付ける必要性大。

涼は店に『準備中』の看板を掛けて愛用バイク【^{ドク}?ダー】である場所へ向かう。

その先は…

【風都署】
フウトシヨ

涼「すみません、刑事科の七瀬^{ナナセ}さんと呼んでいただけますか？」

涼は無自覚な【綺麗営業スマイル】で受け付け嬢に交渉する。

受付嬢「は、はい！ただいま！！／／／」

涼（…風邪か？）

はいはい、鈍感鈍感。

暫くすると一人の女性が奥から現れる。

？「待たせたわね」

涼「いえ、全然。【バイパーウォッチ】と遊んでましたので」

バイパーウォッチとはコブラ型の腕時計ガジェットで、涼は受付嬢とバイパーウォッチの動物形態ライブモードで遊んで暇を潰していたのだ。

受付嬢「お疲れ様です、七瀬刑事」

七瀬「ええ。貴女もびっくりしたでしょ？コイツがギジメモリリョウ持ってた」

受付嬢「ええ、まあ…（汗）」

当事者である涼は（・3・）な感じの顔でバイパーウォッチで遊んでいる。

喫茶 イザナギ

七瀬「さて、私を呼び出したという事はドーパント関係か？そういう事はちゃんとした部署が…」

涼「俺が信用できるのは七瀬さんぐらいですから。それにまだ恩返

しが済んでませんし（笑）」

七瀬「そのことはもういいのに…（ま、頼ってくれるのは嬉しいんだけどね）…で？今回のメモリは？」

七瀬が少しニヤけながら聞く。

涼「メモリは『OGRE』、そのまんま鬼でしょうね。

記憶も未完成でしたが、恐らくは相当力任せの戦い方が主でしょうけど…」

七瀬「じゃあ”剣”が主体の戦い方になるのかしら？」

涼「それが妥当でしょうけど、”戦輪”の手も考えています」

七瀬がコーヒーを一口飲むと一言。

七瀬「相手が違っつて解つても尚、^{ナオ}戦うのか？都市伝説の仮面ライダーは二人いるそうじゃない。それでも？」

その言葉に涼は…

涼「あくまで都市伝説、この身に感じた現実のみが俺の信じるものです。

これまでのドーパントは自滅…または暴発に、意図的に消されたとも推測できません。

七瀬「確かにそうかも知れないけど…」

涼「それじゃあ俺はイレギュラーズに目撃情報を収集してきます。
コーヒーは自分で片付けてくださいね？」

涼はそう言って店から出て行った。

一人店内に取り残された七瀬は呟く。

七瀬「アイツも、仲間を持てば変わるはず…仮面ライダーさんよオ
…一人ぼっちで寂しそうな仮面の戦士を救ってやってくれよ…」

風都イレギュラーズ。

彼らは風都の謎の情報通であり、涼も幾度と無く世話になっている。

そんなイレギュラーズの一員、年中サンタ服の男『サンタちゃん』

の元へ涼は来ていた。

涼「…って訳。何か知ってる？」

サンタ「うん…ちょっと待っててね？」

サンタちゃんがそう言つと手に持った袋の中を漁る。

サンタ「お、あつたあつた！」

暫くするとサンタちゃんは『赤鬼さんと青鬼さん』と書かれた可愛いらしいフォントだが、絵が恐ろしいほどオドロオドロしい絵なのだ。絶対に子供むけじゃない…そう思いながら涼は受け取る。

サンタ「前にゴキブリがヒーローの同人誌が有ったでしょ？そのアシさんが書いたんだってさ。赤鬼は乱暴者だけど弱い者のは絶対手を出さない。青鬼は無口で大人しいけど腹の中は真っ黒！そんな感じで結構内容が濃いんだ」

涼「なるほど…良い情報だ。」

今度イザナギに来てよ。スイーツ一個無料で作ってあげるからさ」

サンタ「良いの？ありがとねー！」

サンタちゃんの声聞きながら涼は去っていった。

喫茶イザナギ地下二階

《EARTH!》

《LIBRARY!》

そして涼は再び大地の本棚に居た。

涼「検索を開始する。キーワードは”コックローチメモリの持ち主”」

本棚が動く。

涼「セカンドキーワードは”オーガメモリ”」

動く。

涼「サードキーワードは”赤鬼と青鬼”」

動く

涼「…ファイナルキーワードは”二重人格”」

そして遂に本が絞^{キオク}り込まれる。

絞り込まれた本^{キオク}を読み終え、閉じると涼はその場を立ち去る。

地上の店のカウンターに戻ると携帯で何処かへ連絡する。

涼「”不知^{シラヌイ}火”、”吹^{フフキ}雪”…今から言う場所で張り込んでくれ」

涼はそれを伝え終わるとコーヒーを入れ、一息ついた

【大江^{オオエソウ}壮】

このボロアパートを二つの影が見ていた。

? 1 「ここだな」

茶色の髪のキツイ目の女性が呟く。

? 2 「そうです。ここが対象の居る場所です」

黒色の長髪で無表情の女性が答える。

不知火「行くぞ、吹雪」

吹雪「無論です、不知火」

《SHADOW!》
シャドウ
インビジブル
《INVISIBLE!》

喫茶イザナギ

カランカラン

喫茶店のドアが開き、ベルが鳴る。

涼が入口を見ると風都署刑事の刃野ジンノ ミキオ 幹夫と真倉マクラ シュン 俊、そして赤いジャケットの男が入ってきた。

涼「おろ？ジンさんにマツさん、夕方以外に来るなんて珍しいね…
そこのお兄さんは？」

涼ほえ？「3」な顔で三人を出迎える涼。
涼の質問に赤いジャケットの男は答えた。

竜「超常犯罪捜査課、テルイリュウ『照井 竜』だ。
ガイアメモリについての情報も扱っているようだな…協力してもらいたい」

その申し出に涼は…

涼「超常」…ね。残念だけど協力する義理は無いよ。
ジンさんやマツさんが居るって事は引き抜かれたようだね…ご愁傷様。
とにかく、知りたいとかその程度でここに来なさんな…身を滅ぼすことになるよ」

その言葉に竜は…

パンツ！！

竜「理由はこれでどうだ」

カウンターテーブルを叩き、刃野や真倉に見えないように涼へと何かを渡す。

それは赤いガイアメモリ… 『ACCCEL』^{アクセル}のメモリだった。

涼「…少々待ちたまえ」

少年検索中

涼「良いでしょう。これはお返しします…さて、何についての情報をお求めで？」

涼は刃野と真倉に見えぬよう『ACCCEL』メモリを返し、仕事モードに切り替える。

ジン「んあ…あ、お前も知ってるだろ？ 『赤鬼青鬼・連続強盗殺人』っての」

心底困ったように話し出す刃野。

涼「ラジオでも言っていましたね、『赤』と答えると血塗れで失血死の状態で見えられ、『青』と答えるとトンでもない事が起きるとか…？」

コメカミを指先でトントンと突きながら思い出すように事件の内容を語る涼。

ジン「ああ…うわ言みたいに『近づくな』とか『頼む、言わないでくれ』とか『か、家内には内緒に…』って言ってたんだよ」

もーわけわからん！…と言わんばかりの顔で説明する刃野。それに合わせ、うんうんと頷く真倉。

涼「それって普通に考えて…」

涼が何かを言おうとしたそのとき、涼の携帯がなる。

涼「…つと、失敬。」

はい、こちらのどかな安らぎと真っ黒な絶望をお届けします喫茶イザナギ出張サービス…こっちに掛けるなと何度言ったら…ッ！
…ご苦労、帰ったら好きなもん作ってやる」

そう言っつて電話を切る涼

涼「朗報ですよ…次の犯行現場は……」

不知火「報告終了つと…」

吹雪「途中変な男と女の子居たけど…」

先程、涼に電話していたのはこの二人の女性だった。

不知火「見るからに女に甘い…という顔をしていたな」
吹雪「あら？マスターも甘いじゃない」

茶髪の女性：『^{シラヌイ}不知火』は心底下らないという顔になり、
黒のロングストレートの女性、『^{フブキ}吹雪』が不知火の言葉に眼を輝か
す。

不知火「あ、主のは…その…そう！優しいのだ！あんなヒョロ男と
一緒にするな！」

吹雪「一理あるわ…一緒にされたら、私たちがたまないです」

「へえつくしっ！」

「ちよ、きたな！こっち向いてクシャミしないでよ！！」

「ズズ…誰か俺の噂でもしてんのか？」

「ほお…噂をすると、その噂された人間がクシャミをするのか。興
味深いね…ゾクゾクするよ」

「げっ！スイッチ入っちゃった！」

「どいてくれ！僕は噂クシャミについて閲覧したいんだ！」

「噂クシヤミ！？なんじゃそりゃ…つて、ああ！逃げんな！」

「ツッコミ取られるなんて…あたし聞いてない！」

吹雪「…まあいいわ。捜査を続けるわよ」

不知火「心得た！」

涼「次の犯行現場は…——風都第三ビルの路地裏です」

その宣言に竜が疑問を抱く。

竜「何故わかる」

涼「うちの従業員のお陰ですよ」

簡単にニコニコとした笑顔で疑問に答える涼。

ジン「ああ、不知火ちゃんと吹雪ちゃん…カッチ雷ちゃんか」

三人の名前に反応した真倉が思いを馳せるように天を仰ぐ。

真倉「騎士道精神を重んじる不知火さんに、氷の様に冷たいけど雪の様に柔らかい性格の吹雪さん…無口だけどクールカワイイな雷ち

やん……マスターって意外にリア充だよな」

その発言に涼は…

涼「マツさーん？ウチの従業員に手エ出したら…鳥葬してあげる）
黒微笑」

殺気染みたオーラが涼から滲み出る。

ちなみに鳥葬とは、死体を木などに吊るして禿鷹などに食べてもらうグロテスクリীনな習わしだ。

真倉「や、やだなあマスター！そんな怖…ゲフゴフン…！恐れ多い
ことでないよ！
ハハハ…（汗）」

後に真倉刑事は語る。

「迂闊に従業員の子たちに思いを馳せるのは死を招く…（震）
…とか。」

風都第三ビル路地裏《夜》

街灯の光が当たらない影から威圧するような声が響く。

『『赤』と『青』…どちらを好む？』

怖がる素振りを見せない被害者であろう人物は平然とした態度で答

える。

「『青』かな？最高にクールな色だ」

『そうか…ならば、苦しめ！』

その言葉と共に青黒い影が青と答えた人物の背後へ回る。

『…』

「残念」

何かを呟こうとした青黒い影の鳩尾ミソオチに右肘がねじ込まれる。

『グ…ッ！何故恐怖しないんだい？こんなシチュエーションで怖がらないヤツはいないはず…！』

「もっと残念…俺例外」

街灯の光に当てられた、その躯体は高校生くらいの背丈…背格好も少年のようだ。

その少年の手には『^{イコル}』のような、又は漢数字の『^二』にも見える機械があった。

少年はそれを腰に当て、二本のUSBメモリのようなものをジャケットの内ポケットから取り出す。

青黒い影はそのUSBメモリに酷似した二本を見て驚愕する。

『キミ…そうか、キミも同士か！』

「お前と一緒になんて心外だぜ…何せ俺は、『仮面ライダー』だからな！」

そして少年は二本のUSB…通称『ガイアメモリ』を起動する。

《ファイター
FIGHTER!》

まずは黒金のガイアメモリを起動し、ベルトの機械の上段のスロットへ挿し込む。

《エア
AIR!》

次に若草色のガイアメモリを起動して、ベルトの機械の下段のスロットへ挿し込む。

そしてベルトの機械の左側を下に弾き、上段スロットを左に弾く。

ベルトの機械は90度回転して縦になり、並列したスロットは間を開ける。

《エア
ファイター
AIR/FIGHTER!!》

二本分のガイアウィスパーと共に爽快な音楽と闘争心の表れの様な音楽が流れる。

顔の右側と右上半身、そして左足が若草色

顔の左側と左上半身、そして右足が黒金^{メタリックブラック}…

顔には『？』を象った装飾角の左右に黄色い双眼。

腰には顔の装飾角と同じく『？』を象ったベルト。

『さあ、お前の罪を聞かせる！』

左右非対称の鎧の戦士が、そこに現れた瞬間だった。

【？の出会い／徘徊する二重の鬼】（後書き）

次回の、仮面ライダー^{ツヴァイ}？は…

涼「ウチの従業員に色目使う覚悟…出来てる？」

翔太郎「アイツのアシスタントだア！？」

涼「左右非対称…それは別れることなく混ざり合った、俺の罪の証
さね」

『さあ、お前の罪を数えろ！／さあ、お前の罪を聞かせる！／さあ、
振り切るぜ！』

第二話【？の出会い／集結する仮面】

これで終いだ…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5698/>

仮面ライダー?(ツヴァイ)

2010年10月9日13時21分発行